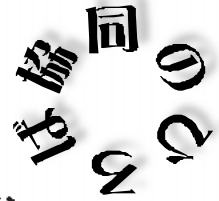


石油文明から太陽文明へ



岡本一道（陶工）小諸市在住

Ⅰ はじめに

30数年前私は、東大工学部の教室を開放し宇井純氏が主宰していた自主講座「公害言論」に参加し、水俣病を初めとする公害問題について学びました。氏のお話の中で今も耳に残るのは、「公害問題は、足を踏んでいる者と踏まれている者の関係だ」と言う言葉です。以来、踏む側にならない為にはどう生きたらよいのかを考え続け、2年間のサラリーマン生活の後、京都府立陶工専修職業訓練校で陶工への第一歩を踏み出しました。浅間山麓の街、小諸で独立後も、地元の人に愛着を持って使ってもらえる様な日用食器を作り続けて今日に至ります。廃棄物のリユース、地元資源の活用を考え、枕木とカラマツ材を使って建てた仕事場に、95年、1KWの風力発電機と140Wの太陽光発電を設置し、エネルギーの一部自給を始めました。

田中県政になって、長野県地球温暖化防止センターが設置され、県への提言書作りの委員会に市民公募枠で参加し、「地球温暖化対策・長野モデル」作りに加わりました。これを県民計画作りに反映させる為の長野県環境審議会地球温暖化対策専門委員会に属し、今春知事に答申しました。以下に、「長

野モデル」の冒頭に記した文章を記します。

「2010年の長野県」

峠を越えると他ではあまり見かけない木製のガードレールが目立ち、長野県に入った事が分かります。そう言えば、信号機も省エネ型で見やすい発光ダイオード製が使われているようです。学校や公共施設等の屋根には必ずと言っていいほど太陽光発電や太陽熱温水器がみられます。教室の机や椅子も県産材製のものだとか。車窓に広がる唐松林は以前に比べてずいぶん手入れが行き届いているように感じます。間伐材をペレット燃料として利用し始めてからの事と聞きました。帰りに立ち寄る友人宅も県の融資制度を利用した県産材利用の省エネ住宅と聞いています。地場産エネルギーの利用や地産地消ができるなんて、都会に住む私達からすれば羨ましい限りです。

今は朝のラッシュ時のはずなのに、長野市内の車は意外なほど少なくスムーズに流れています。マイカー通勤を半減させ、公共交通機関に切り替えた結果だとバスの運転手さんが説明してくれました。観光地に入ってもバスは優遇されているので、快適な旅が楽しめます。さっきから思っていたんですが、長野

県には飲料用自動販売機が少ないですね。観光地はもとより市内でも街並みがすっきり美しく見えるのは、そのせいかもしれません。それから、コンビニや大型店舗なども午後11時には店を閉めるそうですね。信州の美しい星空も、今回の旅の楽しみの一つなので期待できそうです。(以下省略)

以下、温暖化問題に関わる中で辿り着いた、「太陽文明」への転換の道を探ります。

II 使い捨て時代を考える

戦後のベビーブームの時代に生まれた私たちの世代は、父母や祖父母たちから「物を大切にきなさい」と言われて育ってきました。東京オリンピックを境に高度成長期に入ると世の中もひととおり豊かになり「儉約が美德から消費が美德」へと価値観が根底から揺らぎ始め、急成長の歪として水俣病などの公害が全国に広がり、「豊かさとは何か」をそれぞれが問われる時代に突入して行きます。そんな頃就職期を迎えた私自身は、経済の実体はあくまで生産そのものにあるとの考えから、公害を出さずに物を生み出す企業活動は有り得るのかと悩みつつ、2年間メーカー勤めを試みましたが、すでに世の中は、良いものさえ作ってれば、という時代ではないことを実感させられる毎日でした。

会社勤めをしながら通い続けた 宇井純の「自主講座・公害原論」や柳宗悦の民芸論などに触れながら、物事を原点に戻って見直した時、農業、林業など田舎の自然が都会の暮らしを支えている事が見えてきて、自給自足的な手仕事を中心にした田舎暮らしを計画するようになっていったのは、もう30年以上も前の話になります。

こうして選んだ焼き物作りとは、かつては、農閑期に、里山をも含めた小さな循環型社会の中で「結い」による相互扶助の下で営まれていた仕事です。農林業の言わば廃棄物を見事にリサイクルさせて成り立っているこの仕事ならば、気付かぬうちに人を踏みつけるような事も無いだろう、そう考えて京都の陶工専修職業訓練校に学んだときは、24歳、職人人生のスタートとしては遅すぎると言われながらも、ようやく見つけた自分の生き方に毎日が楽しくて仕方がなかった事を思い出します。

私の仕事は、生活の役に立つ道具を作る事が第一義なので、芸術作品を目指す陶芸家と一線を画して、陶器作りの工人という意味の陶工という言葉を好んで用います。焼き物の原点を知りたくて読谷村、常秀工房に1ヶ月ほど居候をしていた時、壺屋の博物館で焼物大工(やちむんじゅーく)という言葉と出会いました。大工とはどうやら名人という意味を含んだ敬称の様です。読谷村での楽しいエピソードをもうひとつ。

村内の焼き物で沖縄料理を出す店へ3人で昼食に行った時の事。ゴーヤチャンプルの載った皿を見ておかみさんが親方に「これ、うちのかねー」と尋ねた時、返って来た答えは「さあー、どうかなあー」。少し解説が必要かも知れません。読谷村には、今でも沖縄で取れる原料を使った伝統的な仕事に誇りを持って受け継いでいるやちむん屋が少なくありません。原料も技法も絵柄までも同じで、ここでは目新しさや、他との違いに余り価値はないのです。「何と豊かな世界なのだろう」その時、素直にそう思いました。それに引き換え、他を出し抜いての目新しさばかりを気にする物づくりの何とけち臭い事か。日頃目にする新製品の多さを思えばこれが工芸に

限った事ではない事が分かります。かくして、気に入って手に入れたはずの品物も、数年後にはまだ充分使えるのに何だか古臭く見えてくる。私達もそろそろこの見え透いた手口に踊らされる事無く、気に入った物を長い間愛用する事の豊かさを身に付けたいものです。沖縄から戻って、以前にも増して、愛着を持って使い続けてもらえる、焼き物づくりを心がけています。

III 仕事と稼ぎ

納得の行く仕事を通じて社会とプラス側で通じていると言う事は、人間にとってとても幸福な事です。今の世の中、大半の人たちが仕事は辛いものと諦めてしまい、その代償としての賃上げ、そして労働時間の短縮のみが求められてきたような気がしますが、自分の仕事が楽しくない原因の一つに、仕事を通じての社会貢献が出来ていない事が考えられます。

国定忠次で有名な群馬県。哲学者、内山節さんの住む上野村も耕地面積の少ない山間の村で、昔は博徒が多かったと聞きました。この村では仕事と稼ぎを分けていて、村外へ稼ぎに出る事は許されても、村の仕事があるときはこれが最優先。昔はこの掟を破ると村八分になったそうです。農林業など自然相手の仕事は待たなし。水の管理、道普請など、今で言う公共工事は無論、田植えに始まる農作業、林業なども結いとが、えいっこ等と呼ばれ協働で進められて来ました。この場合の仕事とはいわゆる宮仕えを指すのではなく自然そのものに仕える、言い換えれば、八百万の神々に仕える仕事だったと私は思います。年中行事の節目節目に祭りが位置づけられているのはその事を物語っているのでしょう。

農耕民族の定住生活を支えた協働による助け合い。私達は知らぬ間に、仕事を通じて人の役に立つ事に喜びを感じる様に生まれて来ているのかも知れません。

自然相手の農林業等は、土地の広さで生産力が決まるので、去年と同じ収穫量が目標値となり、内山さん流に言えば「無事」こそが理想の状態であり、右肩上がりなど有り得ない話なのです。又、この事は言い換えれば、右肩上がりを求めなくともやってゆける仕組みの手本とも言える訳で、循環型社会を考える鍵になると思えます。

朝鮮特需で景気に弾みをつけた後、高度成長の歪として、水俣病などの公害問題に直面することになる日本ですが、企業も行政もこれを解決する能力を持たぬまま、やがて公害は海外に輸出され我々の目に見え難くなってしまいました。バブルの時代を経て、巷に物は溢れかえり、使えるものを買い換えさせる為、手を変え品を変えてのコマーシャルの洪水。十分に物が行き渡り、人々は豊かなのかと思えば、この状態を不景気と呼び、嘆いているのが今なのではないでしょうか。

世界で第4位のCO2排出国が、石油文明の力を総動員して、山を削り、川の流れを変え、海を埋め立てながら次々とゴミになる物を作り続け、稼ぎまくって来た事をこの国では、これまで仕事と呼んで来ました。食料自給率が4割にも満たない事は誰もが知っていますが、その貴重な食料を生産する人口は全体の何割になるのでしょうか。更に不思議な事に、この食べ物を生産する人たちが食べてゆけないと嘆いている有様です。

70年代以降、自立と言う言葉がもてはやされて来ましたが、食料の自給もエネルギーの自給も放棄しているこの国で、私は自立していると誰が言えるのでしょうか。精神的な自

立は棚上げにしておいて、経済的自立ばかりが語られるうちに、自分で稼いで食っている事だけが立派な事のように錯覚し、気が付けば皆、孤立しているのが現状です。これからは稼ぎはほどほどにして、精神的に自立をした者達が協働で仕事の出来る社会が求められます。その時、仕事はきっと楽しくなっていると思うのです。

IV 有るを尽くして

我が家の娘がまだ小学生だった頃、教科書に、未だに、こう書いてあるのを見て驚きました。「日本は資源のない国なのだから・・・」と。思えばこの国は明治の建国以来ずっとこう言い続けてきたのです。一方、海外を訪れた事のある人は、決まって日本の緑の美しさを讃えます。緑や水、風や太陽といった再生可能な資源にこれほど恵まれた国はないと言うのです。資源のない国と被害者意識を煽ることで海外侵略を正当化してきたのが先の戦争であると思えてなりません。そしてその考えが払拭されないままに「地球に優しい」等と言葉だけが一人歩きをしているのが今の日本なのでしょう。

信州では、宴会の中締めの中締めとして良く「有るを尽くして」という言葉を用います。信州人26年目の私が気に入っている言い回しの一つです。確かに、再生可能な自然エネルギーは希薄で不安定なエネルギーですが、何より有難い事に向こうからやって来てくれるのです。まずこれを極力活用する。有るを尽くして足りない分を他に依存する。これが物の順序だと言うのです。95年に1KWのアメリカ製風力発電機を仕事場に設置した時、協力者の方が言われた「風車の発電はささやかでも、これが本来の主役。原発の送電

線から来る電気の方こそ、代替エネルギー」との言葉が心に残ります。

かつてわが国も、全国いたるところに送電線網が張り巡らされる以前は、地域ごとにエネルギーの自治が実践されていました。昭和のはじめ、北海道では200Wの山田式風車が5000基以上普及したそうです。ニシン漁が盛んだった頃海岸線の番小屋での網繕いに重宝したと言う話です。我が街小諸は南斜面の坂の街、かつては300基の水車が回っていたと聞きました。全国トップクラスの日照時間に恵まれたこの街が、太陽光発電とマイクロ水力発電を活用し、大規模集中型から小規模分散型エネルギーの街へと変わってゆくことを夢見ています。

そこで大切な事は省エネルギーの徹底と言う事です。99年我が家に2.88KWの太陽光発電を導入した時、電気の掘り炬燵を炭に代えました。石油を燃やして蒸気を作りタービンを回して発電し、送電線でロスをしながら遠くから運んだ電気を熱として使うのは最も効率の悪い利用法です。石油ストーブでの暖房の方が遥かに理にかなった熱利用なのに、何故か電気はクリーンなエネルギーとされています。テレビやパソコン等電気が無ければ出来ない仕事は限られている筈ですが、時代に逆行する形で、IH調理器や、オール電化住宅の宣伝が目立ちます。数年前から、音楽業界でもアンプラグドがブームになりました。私は今、省エネルギーを更に徹底させた「非電化」を楽しんでいます。これは今に至る時代の中で、電化=文化と刷り込まれてきた、電化依存症と言う文明病からの立ち直りとも言えるでしょう。80cmのパラボラ型反射鏡の焦点に黒塗りのやかんを置いておくと30分で1リットルのお湯が沸かせます。太陽エネルギーでのクッキングは非電化ライフ

の極めつけです。

(製品名「きらびか」 <http://w2.avis.ne.jp/~amane/> で検索してみてください)

V 日和見主義の進め

地方の時代と言われて久しいのに、四半世紀前、自ら選んで地方に住む事を始めた者にとっては、もう一つぴんと来ない言葉です。沖縄からはるばる訪ねてくれた友人と入った蕎麦屋に「地方発送承ります」という張り紙があり、「東京にも送れるのかね」という話になって思わず二人で笑ってしまいました。ものごとを足元から発想するならば、東京と言えども、沖縄と同等の地方と考えて何の不思議もないのだから、何の不思議も感じずにこの張り紙を書いたこの店の主人はたいした人物だと言う結論に達したのです。

大方の役所の職員はその土地に生まれ育った人達で、地域の文化に慣れ親しんでいる分だけ何の不思議も感じることなく、地元の宝に気付かぬ場合が多く、その結果ともすると東京ばかりに目が向く事になる様です。小諸は全国でもトップクラスの日照時間の長い所なのだけれども、市の職員にこの事の認識はほとんどありませんでした。機会を捉えては語りかけ、役所のイベントに参加して「自然エネルギー学校」を積み重ねてようやく今年度から、市独自の個人住宅向け太陽光発電補助制度がスタートしましたが、風土の宝物を正当に評価するにはまだまだ時間がかかりそうです。

南北に長く海に囲まれたこの国は、それぞれに特色の有る風土を持ち、人々はそこに優劣のつけがたいすばらしい文化を築いてきたけれども、今や石油文明のエネルギーの力によって金太郎飴の街づくりが全国を制覇して

しまいました。製品開発に於いても同様で、主に東京など大都会のライフスタイルを基に次々と新しい物が生み出され、有名タレントのテレビCM等を通じて全国一律に普及して行きます。確かに地代、家賃の高い都会で核家族化した若夫婦が共働きでマンション住まいをする場合、朝放り込んでおいた洗濯物が夜には乾いている事の便利さは否めないでしょう。しかし、地方では3世代同居の家庭もまだ多く、「雲行きが怪しいので洗濯物おねがい」と言って出かけられる環境もさほど珍しくはありません。そもそも洗濯日和という言葉があるように、お天気を見ながら洗濯すれば良いのだから乾燥機は不要で、土の有る暮らしが基本なので作業着などの汚れ物は、何もかも一緒に洗う全自動洗濯機ではかえって不便。なのに、家電ショッブではこれが主流を占め2槽式は片隅に追いやられ、その結果多くの人が全自動を使っているのが現実です。

このあたりでは又、太陽熱温水器の利用も盛んですが、日向水の利用に始まったシンプルな太陽熱利用の道具はいつの間にか曇りの日もボイラーで加熱していつでも使える(便利な)製品に仕立て上げられてしまいました。これからは、シンプルで丈夫で安価な地方のライフスタイルに合った製品開発を望みたいと思うのです。こうした要望を東京に本社のある企業にしても相手にされそうも無いので、各地域の実情にあった住宅や製品の開発を地域主体で行えたらいいのでは。それには、お天気がいいから洗濯をしよう、今日は風呂にも入れるぞといった日和見主義を楽しむゆとりが我々にも必要になって来るでしょう。「無印良品」に若者の支持があるように、地方の売り場に日和見主義者を喜ばせる「太陽印良品」が出回る日を楽しみにしていま

す。

VI 「文化干し」を考える

鎌倉生まれの私は、近所の魚屋さんが、捕れたての魚を金網にのせて干物にしている光景を見て育ちました。このお店は、代が変わった今も同じやり方を続け、巷の自然志向とやらも手伝って今再び人気を盛り返しています。一方、スーパー等には「文化干し」なる物が手ごろな値段で沢山並んでいるのを見かけます。

古い話で恐縮ですが、進駐軍が戦後日本を統治し、朝鮮特需をてこに日本の経済が安定し始めた頃から、やたらとこの「文化」なる言葉が巾をきかせ始めました。「文化国家」への道をひた走る当時の世情からすれば、銀蠅が群がる露天での干物作りはいかにも不潔な後進国の光景と見えたのでしょう。そこで登場したのが、屋内でエネルギーを使って清潔に干物作りをする「文化干し」という訳です。文化包丁、文化鍋などは単に新式のハイカラな位の意味なのでしょうが、文化住宅、文化的な暮らしとなってくると文化＝電化の意味合いとも重なり合ってきて、どうやら自然のままと言うのは野蛮であって、エネルギーを使っての人工的な暮らしこそが文化的な暮らしとする傾向が見えてきます。普及し始めたテレビのホームドラマを通じて当時の日本人に執拗に刷り込まれた憧れのアメリカン・ライフスタイルを代表する光景として、真っ白な大型冷蔵庫から大瓶に入った牛乳ががぶ飲みする子供たちの姿を思い出す人も多いのではないのでしょうか。

こうして私達は、「文化」と「文明」の言葉の区別も曖昧にしたまま、エネルギーの大量消費を前提にした「石油文明」の時代を生

きて来ました。インド人の二十倍ものCO₂を排出する事で成り立つ憧れのライフスタイルをアメリカがこのまま続けると、自国の石油はあと十数年で底をつくと言われていきます。アフガン、イラクへの軍事行動はアメリカが石油文明を生きぬくための公共事業であり、今や、その大義をまともに信ずる者がいるとすれば、余程のお人好しです。半世紀にわたりアメリカのライフスタイルを無批判に追いつけてきた私達日本人も、エネルギー大量消費の「石油文明」から脱却し、太陽と共に有る暮らしを模索すべき時を迎えています。

お天気まかせという言葉があります。ましてや、お天気屋と言われれば褒められていると思う人はいない筈です。電力会社の人も「太陽光発電は不安定なので」等と、否定的な見方をしています。一月先の予定表が真っ黒に埋まってないと不安になる現代人にとっては、意のままにならない気まぐれな物を石油文明の力で克服し、何よりもまず、自分の予定どおりに事が進むのを良しとして来たのでしょう。こうして暮らしの中に空間はもとより、時間のスペースも無くなります息苦しくなってゆきます。そんな中、近頃スローフードが流行のようですが、これとて日本に持ち込まれるとたちまち本来の意味など忘れ去り、健康ブームのグルメ指向に取り込まれて行きます。風土の気候を活用してひたすら待つ事で熟成される味。これこそ「太陽文明」の豊かさと言えます。お天気の良い日を見計らって、天日干しの干物でも買いに行ってみませんか。干物は天日干しに限る。

Ⅶ 石油文明から太陽文明へ（結びに代えて）

40億年前、原始の海で初めての生命が生まれました。以来、地球は生命を育み、生命は地球を進化させて来たのです。長い前史の後誕生した人類は、自らの手足とわずかな道具でそれぞれに特色のある文化を築いてきました。18世紀の半ばになってイギリスで始まった産業革命は、地球が10数億年かけて蓄えてきた化石燃料を源として、生産力の飛躍的な発展を推し進めました。資源をめぐる度重なる争いと地球の営みを遥かにしのぐスピードで生産活動を続けたあげく、多くの生き物たちを絶滅に追い込み、更には第三世界の人々や未来を担う子供達に、豊かさのつけだけを押し付ける結果をもたらしていました。

今、人類が直面する地球温暖化問題に関して、全てが加害者であり被害者であるという言い方がありますが、果たして本当でしょうか。先のヨハネスブルグでのIEA報告でも、世界の人口の1/4に当たる16億人が未だに電気を使えない環境にあるということです。一方日本はといえば、CO₂の総排出量に於いて世界第4位、一人当たりの排出量で見るとインド人の約9人分と言う事実からしても責任の重さが分かります。つまりは、地球温暖化問題も公害問題同様、加害者の責任をはっきりさせておく必要があるのです。1997年、歴史的な第一歩として、京都議定書が採択されましたが、その直後、最大の地球温暖化貢献国であるアメリカが一方向的に離脱を宣言。まだ、しばらくの間、石油文明の豊かさの呪縛から抜けられそうにありません。

昼夜の隔たりがある事で、地球上全ての生

命が養われ、豊かな循環系が保たれて来たにも拘らず、石油文明先進国は、夜を明るくし、24時間型ライフスタイルを広めて来ました。一方、発展途上国と言われる国々は、今も、地方色豊かな、文化的生活を営んでいるのです。私は、これらの国々を、その多様性による豊かさに敬意を表して、太陽文明先進国と呼ぶ事を提案いたします。そして、この物差を当ててみると多様性を否定し、世界の画一化に邁進する、石油文明先進国は、太陽文明後進国に違いありません。

10年ほど前、「綺麗と美しい」の違いについて友と良く語り合いました。「道が舗装されて綺麗になった。護岸が整備され綺麗になった。しかし、綺麗になって（整理整頓、画一化されて）美しく無くなったね」と。綺麗にすることが長い間、無駄な公共事業の大義名分とされて来た様です。

太陽文明の中心を成す、自然エネルギーの普及に関して、原発推進派（原発は石油文明のあだ花）の人達は「じゃあ、原始生活に戻るのですか」と良く口にします。戻ると言う言葉の中に、手に入れた物を失うという恐怖心が見て取れます。一体、何を手に入れたのでしょうか、何を失うのでしょうか。私達の子や孫のそして地球そのものの未来を失おうとしているこの時に。

言葉は無力かも知れない、しかし、言葉には可能性があると思いたい。「石油文明から太陽文明へ」昔に戻るのではなく、豊かな未来に進んでゆきましょう。さあ、太陽文明の豊かなイメージをうーんと膨らませて見てください。